日本都市計画学会関西支部　2022 年度　国際都市計画セミナー

「Beyond “Green” －ランドスケープアーキテクチャーの可能性を探る－」

◆開催要領

日　時：2022 年 12 月 5 日（月）18：30～20：30
会　場：関西大学梅田キャンパス 8F 大ホール
　　“KANDAI Me RISE ホール”
参加者：54 名（講演者 1 名、委員会関係者 7 名含む）
プログラム：
　18：30～18：35　会長挨拶、講師紹介
　18：35～20：05　講演（鈴木　マキエ氏）
　20：05～20：25　質疑，意見交換
　20：25～20：30　総括，閉会

◆開会挨拶

（国際交流委員会 委員長 大庭氏（京都大学））

国際交流委員会は、例年、会員間の交流を目的とした見学会やまち歩きと都市計画セミナーといった２つの活動を行っている。都市計画セミナーでは、海外の様々な都市計画に関わる情報を共有し、我が国の発展に寄与することを目的としている。

今回のセミナーでは、ランドスケープアーキテクトとしてご活躍されている鈴木マキエ氏より国内事例も含め貴重な取り組みについてご講演いただく。今日の貴重な機会をご提供いただくことに感謝し、挨拶に代えさせていただく。

◆講演

【講師】

鈴木　マキエ 氏
（ランドスケープアーキテクト。GGN 社所属。ワシントン大学客員教授。MLA（ランドスケープアーキテクチャ修士号）（ワシントン大学）

【講演概要】

自己紹介・経歴

ランドスケープは、まちをつくる上で、基盤になる部分を作っていく。土地を読み解き、大きなジェスチャーや流れなどランドスケープが最初に打ち出すもの。そのうえで、アーバンデザイナーなどの専門家たちと共に skyline や density を積み上げていくのが、良質なプロジェクトを造る手法。

ランドスケープはコンセプトの最初のストーリーになる部分であり、まちづくりの基盤・ビジョンを打ち出すなかで尊重されるべきもの。

以前勤めていた SASAKI アソシエイツ時代に担当した死海のマスタープランに携わった際は、「どうすればこの場所でしかできないデザインができるか」、「どうすればこの場所の良さを生かしたデザインができるか」という事を念頭に、最初に自然のランドスケープを読み取り、厳しい環境に対して、サスティナビリティを伸ばしながら、どのように開発につなげるかを他の専門家と一緒に検討した。

１．もちろん GREEN／BURKE MUSEUM

“Beyond Green”とタイトルを付けたがよくよく考えれば、“Beyond Just Green”。

日本では、認知度が低いためか、ランドスケープアーキテクチャーを緑化や園芸と訳すこと多いが単純な緑化というだけではないということをこの公演を通じて紹介したい。しかし、もちろん植栽デザインを軽視している訳ではなく、“本来の緑”を生かした植栽や、特に在来種を扱うことによる生物多様性への貢献や風土が感じられる本物の場所つくりを重視している。

GGN 社では、自生種が繁殖している場所で、植物がどのようなコミュニティを築いているか、そのコミュニティが、どのような特徴の場所にあるのかも研究し、それらを中心に生物多様性にも対応していく試みを行っている。

ランドスケープでは、地形や植栽を使って空間を作る。植栽は、シークエンス（移動することで変化する景色）の表現や、空間のスケール感をデザインしたり、伝えたりする。植栽はランドスケープのベースになるものであることを意識し“Beyond　Just Green”と表現している。

植栽を重視したプロジェクト例の一つが、ワシントン大にある BURKE MUSEUM。この自然歴史博物館は実作業を見て学ぶコンセプトが特徴的なミュージアムである。この理念を踏まえて、植物と関わりをもてるようなガーデンづくりをしている。

例としてカマスガーデンを挙げる。カマスは原住民の間では食料や薬に使う神聖な植物だったが、ヨーロッパからの移民によりカマスが激減してしまった。このため、先住民グループと協力し、単にカマスを植栽デザインに使用し見学するだけではなく、実際に植物と人との関係性を体験できるガーデンを作った。現在カマスガーデンはワシントン大学とボランティアにより運営されている。

シアトルは従来、日陰や水が多い地域であり、そういった環境を好む植物は、ヨーロッパ系の人たちにとってイメージが良くなく、ネガティブな呼び名を付けられた在来種が多くなってしまい、一般的に在来種をガーデンに使用されることが少なかった。しかし、カマスやルピナス（ノボリフジ）、サラールとシダといった相性のよい植物を使って、雰囲気のある在来種のシェードガーデンを作る取り組により、イメージも改善され、このようなガーデンの普及に繋がっている。

2．都市・地域デザイン／CCDC

次にBeyond部について。これは植栽だけではなく、ランドスケープの大きなスケールや流れ、都市づくりの基盤になる貢献のし方を表している。

ランドスケープでは、大きなスケールのスタディから、土地の本質（時代や場所によって変わらない風土として普遍的なもの）を読み取り、インスピレーションとして引き出し、デザインに反映させていく。

未来につなげるべき土地の本質をデザインの中に活かし、本物の場を作るために、プロジェクトを始める前に入念な調査を行う。

一つの事例が、ワシントン DC での City Center DC（CCDC）再生プロジェクト。ワシントン DC は放射状に延びたグリッドにより街がデザインされているが、設計当初は各ブロックの内部には路地が設けられており、ヒューマンスケールの街が設計されていた。この考えをフォスター＆パートナーと協働の MP の枠組みに反映させ、開発に生かしている。

具体的には、路地に入るとメインプラザがあるようにデザインし、中に人を誘うようなジェスチャーを取り入れたり、少し距離があるところからも水景を視認できるような工夫をしたり、コミュニティの核となる空間として、公園をデザインしている。

ランドスケープアーキテクトには、このように大きな都市デザインを読み取り、地域の枠組みを作るとともに、その読み取った本質を日常空間に反映させるための「公共デザインのプロ」としての役割もある。

3．公共空間デザイン／Lurie Garden

「何もない」と思われている空間を公共のために変えていく事もランドスケープアーキテクチャーが都市づくりで貢献できる要素。ここでもＧＧＮ流のデザインプロセスで土地の本質を見出し、小さなスケールにまで反映させデザインを組み立てていく。

その事例の一つがシカゴのミレニアム・パークにあるルリー・ガーデン。今では市外からのお客さんを連れていくシカゴの誇り的な公共空間だが、以前は操車場と駐車場だった。

ここは、シカゴの街の初期は湖岸であったことから、昔の湖側を「ダークプレート」と呼ばれる力強い水辺の工業都市シカゴのルーツ（過去）をコンセプトとする水を意識したウェットなエリアと「ライトプレート」と呼ばれる、印象的な建築ビューが広がるシカゴのこれからの未来をコンセプトにした陸側のドライなエリアとに分けられている。

さらに、過去のシカゴと未来のシカゴをつなぐように、エリア間のボードウォークをデザインすると共に、園内にあるスタジアムへ、多くの人が訪れやすくなるような設計や、ショルダー・ヘッジにより公園と賑やかな市街地や隣接するイベント会場を空間的に区切るなど、都会の中で心落ち着くオアシスを感じられるよ

うな工夫をしている。

プロジェクトでは世界的に有名な園芸家、ピートウドルフ氏と協働し、過半数がシカゴエリアの在来種を使ったガーデニングを提案している。これを契機に、シカゴエリアで従来なかった在来種を取り入れたガーデンが評価され普及した。

ルリー・ガーデンは季節を通して四季の良さがわかるガーデンになっており、土地の本質をデザインに反映し、ストーリー化することで、シカゴの良さを感じてもらい、愛着が湧くような場所となることを意識したデザインとなっている。

次にソウル近郊のドンタンの公共住宅プロジェクトを空間的アイデアを詳細まで引き継いでいく事例として紹介する。

ドンタンエリアは高低差が激しく、山と水のコンビネーションが地形的に特徴的な場所である。このような特徴を背景に、水が人を公園の中心部に誘うようなデザインを提案。水に表情をつけたり、韓国文化を象徴するモチーフをゾーンごとのインスピレーションをして使ったりすることで、水の動きにバリエーションを付け、面白みのあるシークエンスを演出。例えば絵画によく使われている蝶がモチーフのエリアではエレガントな水の動きを表現するスタディをしている。

水の流れは３Ｄモデルでも研究しているが、小さめの模型実験や、実寸大での実験を通して、水のスピード感や泡立ち感といったことをコントロールしデザインに反映している。

このデザインに関しても、マスタープランの本質や伝えたいストーリーを考え、サイトデザインや植栽デザイン、詳細なディティールにまで反映させるように一貫した取り組みを行っている。

４．グリーンインフラ／Bill & Melinda Gates Foundation Campus

ランドスケープアーキテクチャーが貢献できる要素のもう１つに、グリーンインフラがあり、シアトルのビル＆メリンダ ゲイツ財団キャンパスの事例を紹介する。

この地域は、ブラウンフィールド（汚染された工業地帯）であった地域。

元々沼地であった地域であるという事から、建物を水景と橋のようなカーペットでつなぐデザインにしている。水景はデザインとしてのみ使われるのではなく、雨水の循環システムとしても利用されている。

ポートランドやシアトルではこういった循環システムが多く普及しており、ランドスケープアーキテクトが検討チームに入ることで、単に機能的な循環システムに加えて、デザインの一部として活用するという工夫を行っている。

一般的なグリーンインフラの事例だが、シアトルでは、Soil Cells が義務化されている。地中に箱状の Soil Cells を設置することで、過剰な締固めが抑制され、樹木の生育を助ける。Soil Cells の上部に透水性の平板などを組み合わせることで保水能力も発揮し、潅水や排水など下水への負荷も軽減できる。こういったグリーンインフラがアメリカでは一般的に普及している。

その他、典型的なグリーンインフラではないが、環境問題や気候変動が問題となっている中で、それをデザインとして取り入れた例として、India Basin Shoreline Park の事例を紹介する。

ここは過去に移民船が乗り捨てられていたり、軍用エリアとして、汚染された地域であった。

水際は工業地帯あったため臨港道路が隣接する住民と水辺を分断してる。この地域をどうやって水辺や緑地に繋げるか、どんなことがしたいか、どんなデザインが望ましいかをコミュニティとして考えるために、コミュニティアウトリーチにも力を注いだ。

当エリアの海面は 80 年後、２ｍ上昇すると言われている。海面上昇を考慮し、建築や設備の位置を決定、将来的にも水辺利用を可能にするため浮き桟橋をデザインに取り入れている。

水際に繋がる緑地は、海水の影響を考えると、すべてを芝でデザインすることは困難であったため、海水にも適応できるキャレックスといった在来種などを選択し、気候変動にも対応したデザインとしている。

NY でも海面上昇に対応したデザイン普及しており、アメリカでは海面上昇に対応できるデザインが多く提案されている。

これらの事例を通じて、ランドスケープアーキテクチャーが単純な緑化だけではないという事が理解できると思う。

５．日本のプロジェクト／うめきた 2 期開発プロジェクト

うめきた２期開発プロジェクトもこれまで紹介してきた取り組みを全て取り入れている事例の一つである。

まず、最初に大阪は非常に緑が少ない街。普通の公園が少ない都市で、一定量の大きな緑があることに価値があり、未来への求心力に繋がるという考えでプロジェクトに取り組んでいる。

もちろん GGN 社のデザインプロセスの一環としてまず歴史・文化、地学、環境などを深く調査。土地の本質として、梅田は歴史的に水との関係性が深いことを発見。さらに水との関わりとして運河をつくったり、橋を架けたり、そういった大阪らしいバイタリティ溢れる気質も面白いと感じた。

さらに、日本のスケールで考えると、日本庭園などからも分かる技術の高さ。

これらの、日本のスケール、大阪のスケール、うめきたのスケールという、３つのレイヤーでこの場所らしいデザインを考えている。

プロジェクトでは、ビジョンに基づいた大きなフレームワークを決定した後はゾーンごとにスタディをしている。また、来訪者の距離感や座りやすさといった細かいところも一つずつ社内ワークショップで詰めていく。

３D や VR で空間に入り視線をコントロールするシークエンスをデザインしたり、水景の水の動きや歩道の素材など、細かいところまで検討して、設計、施工に反映させている。その他、スペースシンタックスさんなどと協働し、データに基づいた空間分析や人の流れもデザインに反映している。

これらを通じて、多様な空間が存在する都会の中のオアシス、日本らしさを感じられる市民に開かれた都市庭園を目指したい。

植栽や生物多様性的なデザインにもこだわっている。淀川との関係性を考えたり、低地固有の風土が感じられるように、エノキやムクを使ったり、見学に行った大阪を取り巻く山を思い起こさせるような仕掛けをしたり。デザインには日本の季節をハイライトする桜や紅葉も取り入れて、レイヤー感を感じられるような工夫をしている。

植栽の選定にあたっては、自生種又は文化的に日本に根付いているものを 500 種類以上リスト化し、生物多様性や風土を感じさせることに役立てている。　植栽の配置では、強弱をつけることでグラデーションを演出したり、ビューに変化をつけたりしている。照明器具も昆虫に配慮したり、照度を時間帯で変えていくなど人のための空間と生物多様性とのバランスを重視。昆虫が好きな植栽エリアをマネージしていくためのディスカッションなどもし、すごく細かな部分も考えてデザインしている。

こういったことを、運営側も含めてチーム全員で確認しながらビジョンを共有しプロジェクトにあたっている。

本日いらっしゃる都市計画の専門家の方も含めて、日本のまちが良くなるように一緒に頑張っていきたい。

◆質疑・意見交換

・“Beyond Just Green”について

（質問者）

土地のアイデンティティーというキーワードはよく理解できたが、“Beyond”というキーワードについて考え方をもう少し詳しく教えていただきたい。

（鈴木氏）

Beyond というのは、都市デザインや動線・空間形成など、ランドスケープの活躍の場は緑だけではないと言う意図で使用。本物の場所を作る事を大事にしている。その場所が本物になるように、歴史や文化から本質を探り、反映することで、地元の方に愛され、使われることでアイデンティティーに繋がっていく。いろんな方向から、その場所が本物の場所になるという事を目指して取り組んでいる。

・場所の本質について

（質問者）

場所の本質には様々なものがあり、アプローチも異なる。作品ごとに何を本質とするかを変えているということか。

（鈴木氏）

本質を見出す事自体を目的としているのではない。本物の場所になるため、その本質を探り、生かしていく。本物の場所というのは、ユーザーが愛着を感じられる場所や人々の日常の一部や思い出になることも含まれる。

どうやったらそういう場所をつくれるかという手段のために本質を見出し、ストーリー化して、デザインに反映させていく。

・DX との関係性

（質問者）

日本でも、DX の取り組みが進んでいる。ランドスケープの中では、デジタルを使ってデザインをしているのはどのくらい普及しているか。

（鈴木氏）

デジタル的な取り組みも様々。3Ｄモデルや VR、グラスホッパー、アルゴリズムの活用。他のファームでは最近ではＡＩグラフィックスからインスピレーションを創造するシステムなど、色々な取り組みがある。

◆閉会挨拶

（国際交流委員 岡氏　関西大学）

本日は多くの実務者に集まっていただいた中、貴重な講演をいただき、大変有意義な時間であった。

海外で活躍されている方々が、うめきたの事、大阪の事、日本の事をこれだけ調べて、デザインに生かしている。完成までの日々を、その光景を楽しみに過ごせる、素晴らしい場所になると思う。

貴重なご講演をいただいた鈴木マキエ氏に多大な感謝を申し上げる。